

向社会的行動を促す教師の働きかけに関する事例研究 ～信念と指導行動を関連付けて～

中 田 亘 紀*・赤 坂 真 二**

(令和6年9月20日受付；令和6年10月23日受理)

要 旨

本研究では、教師はどのような働きかけで向社会的行動を促しているのか、「指導に関する信念」と指導行動を関連付けながら分析し、その具体を明らかにすることを目的とした。その結果、「困っている人に目を向け、援助する行動」や「感謝を伝える行動」を望ましい姿として提示する【行動の提示】が確認された。その背景として、〈他者の感情に関心を持ち、察知する力の育成する信念〉や〈感謝し合う雰囲気や醸成する信念〉を持っていることが確認された。これらの結果から、第一に友達の気持ちに目を向け、気づく力を、そして、友達に感謝する力を育成することを志向し、それらを望ましい姿やとるべき行動として積極的に提示していくことで、向社会的行動を促進していた可能性が示唆された。

KEY WORDS

思いやり 向社会的行動 信念 指導行動

1 問題の所在と目的

「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要（文部科学省，2023）」では、児童のいじめ認知件数が過去最多数を更新している背景から、小学校におけるいじめの問題が深刻であることが窺える⁽¹⁾。これに対して「いじめの防止等のための基本的な方針（文部科学省，2017）」では、いじめの防止のために、「学校の教育活動全体を通じた豊かな心の育成」の重要性を示し、その中で「思いやりの気持ちの育成」を挙げており⁽²⁾、「小学校学習指導要領解説総則（文部科学省，2017）」でも、「自殺やいじめに関わる問題や環境問題などを考える上でも、常に根本において重視すべき事柄」として、思いやりの心を育成する大切さを示唆している⁽³⁾。これらのことから、いじめに関わる問題に対応するために、児童の思いやりの心を育成する必要性が窺える。

「思いやり」に関して、山村・中谷（2012）は、思いやりの気持ちの面を直接測定することは難しいことを指摘し、これまでの研究では、「向社会的行動（prosocial behavior）」を行動指標としてきたことを述べている⁽⁴⁾。同様に、坂井（2006）も、向社会的行動が「思いやり」の指標として扱いやすいことを示しており⁽⁵⁾、塚本（2017）も「『思いやり』とは、日常語としても用いられる曖昧な概念であるが、心理学では向社会的行動の問題として論じられてきている」と述べている⁽⁶⁾。よって、本研究においても、「思いやり」の指標として向社会的行動に焦点を当てて考察を続けていく。

向社会的行動について、Eisenberg・Mussen（1989）は「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為」と定義している⁽⁷⁾。一方、菊池（1983）によると、自発性の条件は「場合に応じて柔軟に適応したほうが良い」と述べている⁽⁸⁾。これらを踏まえ、本研究における向社会的行動を「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行為」と定義し考察を続けていく。

児童の向社会的行動を促す教師の働きかけに関する研究として、例えば、塚本（前掲）は、向社会的行動を促す教師の指導態度を、「指示的態度」「受容的態度」「親和的態度」に分けて検討した結果、小学校段階においては、「指示的態度」が最も向社会的行動の促進に影響を与えていたことを明らかにしている⁽⁹⁾。また、村井・岡本（2019）は、向社会的行動を促す教師の働きかけとして、「状況の提示」「理由付け」「授業実践」「解釈」「行動の提示」「禁止」「承認」「他児童へのモデリング」の8つを挙げている⁽¹⁰⁾。さらに、蔵永（2020）は、「共感」と「感謝」を思いやりの基盤として捉え、それらを育むために、他者の感情にラベリングしたり、感謝の手紙を書いたりといった手立てを考察している⁽¹¹⁾。これらのことから、向社会的行動は、教師による「指示的態度」や、8つの指導行動で「共感」や「感謝」を育むことで促されるものであると考えられる。

一方で、先行研究に対してはいくつかの課題が指摘できる。例えば、塚本（前掲）による調査は、教師の指導態度を4件法で評定する質問紙調査に留まっており⁽¹²⁾、蔵永（前掲）による調査は、思いやりに関する先行研究の概観に留まっている⁽¹³⁾。つまり、これらの研究では、教師の具体的な指導行動を分析するに至っていないということが指摘できる。このことに加えて村井・岡本（前掲）は、「他の教員による指導の場面などを更なる事例を集め、研究を行うこと」によって、研究の妥当性を高める必要性を指摘しており⁽¹⁴⁾、山本ら（2021）は、向社会的行動を促す教師の働きかけについて、実践的な研究を行うことで、具体的な教育効果にも言及でき、「より実践に即した示唆を得ることができる」と主張している⁽¹⁵⁾。これらのことから、向社会的行動に関する研究は、量的な調査に偏っている実態が窺えるため、その具体を示す必要があると考えられる。

また、岡井・梶井（2021）は、指導観や教育観などの「指導に関する信念」は、教師の指導行動を規定するものとして位置付けられてきたことを示している⁽¹⁶⁾。さらに、佐藤ら（1990）は、教師の信念がどのようにして実践的指導を形成していくのかについて検討する必要性を述べている⁽¹⁷⁾。そのように指導行動と信念の関連を検討することに対して、秋田（1992）は、「自覚してなかった自分の特徴に教師自身が気付くことが可能になる」と述べた⁽¹⁸⁾。これらの主張を概観すると、教師の指導行動を検証する際、「指導に関する信念」を明らかにし、指導行動と関連付けて考察する必要性が窺える。

ここまでの課題を整理する。向社会的行動を促す教師の指導行動の具体を分析することで、村井・岡本（前掲）⁽¹⁹⁾の研究の妥当性を高めることや、具体的教育効果に言及することが可能となるだろう。また、指導行動を分析するにあたって、指導観や教育観などの「指導に関する信念」と関連付けて検討することによって、自分の特徴に教師自身が気付くことが可能となる。しかしながら、向社会的行動を促す教師の指導行動の具体を、「指導に関する信念」と関連付けて分析した研究は、管見の限り見られないため実証していく必要がある。以上を踏まえ、本研究では、教師はどのような働きかけで向社会的行動を促しているのか、「指導に関する信念」と指導行動を関連付けながら分析し、その具体を明らかにすることを目的とする。これを通して、児童の思いやりを育む際の指導の在り方が明らかになり、先に述べた児童の学校不適応や人間関係上の問題に対する示唆が得られるのではないかと考えられる。

2 方法

2.1 調査期間

2023年10月10日～2023年11月2日

2.2 調査協力者

A県公立B小学校第6年C学級29名（男児16名、女児13名）、担任D教諭を調査協力者とした。なお、調査に同意の得られた28名を対象とした。対象の選定に際しては、以下の手順を踏まえた。

まず始めに、C学級における向社会的行動がどの程度行われているか調査するため、塚本（前掲）⁽²⁰⁾によって作成された「向社会的行動尺度」を使用した。向社会的行動尺度は、「対人トラブル援助」「学習・日常生活の援助」の2因子、前13項目から構成されている。調査に際しては、塚本（前掲）に倣って4件法（「4：たくさんやった」「3：まあまあやった」「2：あまりやったことがない」「1：やったことがない」）で回答を求めた。「4：たくさんやった」「3：まあまあやった」に記したものを高群、「2：あまりやったことがない」「1：やったことがない」に記したものを低群とした。そして、高群と低群の人数差を比較するために、直接確率計算の正確二項検定を行った。その結果、高群がすべての項目において1%水準で有意に多いことが確認された。この結果から、C学級は向社会的行動が多く生起されている学級であると判断された。

また、D教諭との事前の談話を行った（表1）。下線部①から、困っている友達がいるときに積極的に関わられるクラスを目指していることが分かり、児童の思いやりを強調する指導観や意識を持っていることが窺えた。山本ら（前掲）は、特に学級での思いやりを強調した指導が児童の向社会的行動に影響を与えることを示している⁽²¹⁾ことから、D教諭の指導が、C学級の向社会的行動を促進する一因となっている可能性が示唆されたため、D教諭を調査対象とした。

表1 D教諭との事前の談話の記録

発話者	内容
筆者	その関わらせたいという思いのところに、もうちょっと深掘りしたいなと思っていて、例えばどういう関わり合いが、先生の中、また校内の目標として挙げられているのですか。
D教諭	関わり合いとして自分が大事にしているのは、いつでもどこでも誰とでもという感じなんですよ。①困ったらいつでも関われるクラスにしたいし、それが勉強の場でも朝の場でも休み時間の場でも聞き合えるクラスにしたいし、関わり合えるクラスにしたい。特定の子としか関われないんじゃないかと、普段一緒にいないような子とか、男女とかそういったところを全部取っ払って関われるようになるのが理想です。なので、それを大事にしているかな、という感じですかね。

2. 3 調査の手続き

村井・岡本（前掲）によると、「小学校における教師の向社会的行動を促す働きかけは、日常生活、授業、授業時間内、行事等の様々な場面で行われている」と述べている⁽²²⁾。そのため、担任と協議の上、特に思いやりを育む働きかけを多く行っている、朝の会（11回）、帰りの会（10回）、算数科（6時間）、社会科（8時間）、特別活動（1回）において、教師の発話記録を行った。

次に、「指導に関する信念」を調べるにあたって、秋田（前掲）は、「半構造化された面接などを通してより内容を深く調べたり、観察と組み合わせる行動との関連を調べる研究が必要と考えられる」と述べている⁽²³⁾ことから、D教諭に半構造化インタビュー調査を行い、児童の向社会的行動を促すことに関する信念を明らかにした。例えば、「問題が解けた児童にまだ解けていない児童に教えに行くよう指示していましたが、どんな意図がありますか。」や、「ありがたいのりれーを行っていましたが、児童にとってどのような効果を期待していますか。」などのように、実際に見られた指導行動の意図や背景について尋ねる形式を構成した。半構造化インタビューは、放課後に計3回（各20分程度）実施された。

なお、指導行動及び半構造化インタビューの発話記録にあたってはボイスレコーダーとビデオカメラを用いて行い、プロトコルデータを作成した。

2. 4 分析方法

2. 4. 1 分析1 指導行動カテゴリについて

向社会的行動を促進する際にどのような指導行動を行っているかを検証するため、調査場面中のD教諭の発話から抽出・分類し、分析を行った。カテゴリへの抽出・分類には、村井・岡本（前掲）の「向社会的行動を促す教師の働きかけ」⁽²⁴⁾を用いた。発話の区切りについては、岸・野嶋（2006）⁽²⁵⁾を参考に、①話者交代、②発話中の一定の間（2秒間）、③発話機能の変わり目の3つを基準として区切り、1発話とした。また、その際、筆者と学部生、大学院生、計5名で繰り返し検討をした。

2. 4. 2 分析2 指導行動の具体例と「指導に関する信念」の関連について

指導行動と背景にある信念を明らかにするため、指導行動と信念の関連を明らかにした黒羽（1999）⁽²⁶⁾を参考に分析した。まず指導行動の具体を挙げ、次に半構造化インタビューの記録を基に、指導行動の具体に関する意図や背景を明らかにし、指導行動と関連付けた。

2. 5 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究対象の学校長および対象学級の児童に対し、事前に研究の目的の説明に加え、研究実施の承諾を得た。さらに、研究で得た情報は、研究目的以外で使用しないこと、データ処理後は、一定期間管理後、適切に破棄することを文書と口頭で説明し、了承を得た。なお、内容及び実施に関して学校から問題点の報告はなかった。

3 結果と考察

3.1 分析1 指導行動カテゴリーについて

分析の結果、向社会的行動を促す働きかけは、8つの指導行動カテゴリーに分類された（表2）。なお、本文中の【カテゴリー】は、太字で示した。

表2 向社会的行動を促す指導行動の分類

【カテゴリー】 カテゴリーの説明	指導行動の事例	事例数	[%]
【状況の提示】 困っている人や助けを求めている人がいるという周囲の状況を伝える働きかけ	「先生、さっき困っている人を三四人見つけたよ。」	10	[2.3]
【理由付け】 向社会的行動の意義や、指示の意図などを伝える働きかけ	「そういう（困っている）人を見かけたら行動するっていう気持ちを作っていくと、お互い良い人間関係になれるよ。」	31	[7.2]
【授業実践】 向社会的行動を促す授業や取り組み	ハッピータイム いじめ見逃しゼロ宣言	14	[3.2]
【解釈】 相手の気持ちを考えさせる働きかけ	「それ書いてもらうだけでもみんな嬉しんじゃない。」	4	[0.9]
【行動の提示】 望ましい向社会的行動を提示する働きかけ	「ちょっと手が止まって悩んでそうだなっていう人に声かけるよ。」	257	[59.9]
【禁止】 相手の気持ちを考えない行動を叱ったり、やめさせたりする働きかけ	「ペアで一人だけが喋るのはだめだよ。」	11	[2.5]
【承認】 向社会的行動が見られた際にほめたり、認めたりする働きかけ	「ありがとうE（児童名）さん。助けていて偉い。」	51	[11.8]
【他児童へのモデリング】 望ましい向社会的行動を他の児童へ共有する働きかけ	「お友達に優しく接して教えてあげている姿が見られました。」	51	[11.8]

また、【行動の提示】が、他の指導行動カテゴリーよりも相対的に多いことが示された。このことからD教諭は、【行動の提示】をより強く意識した指導を通して、向社会的行動を促進していることが推察された。

このことは、小学生段階において、児童のとるべき行動を直接指示要請する「指示的態度」が、向社会的行動を促す効果的な指導法であるという（塚本、前掲）⁽²⁷⁾の主張を支持する結果となった。よって、分析2では、【行動の提示】の具体例を挙げ、それに対する信念を明らかにしていく。

3.2 分析2 指導行動の具体例と「指導に関する信念」の関連について

分析2では、教師の語りから信念を明らかにした黒羽（前掲）⁽²⁸⁾に依拠し、【行動の提示】の具体的場面を挙げ、信念についてインタビューを行った。

3.2.1 〈他者の感情に関心を持ち、察知する力を育成する信念〉

事例1

発話者	内容
D教諭	終わった人同士で確かめ合ったり、② <u>ちょっと手が止まって悩んでそうだなっていう人に声かけるよ。</u>

事例1は、算数の授業で練習問題に取り組む場面である。3分程度の時間が与えられ、まずは個人で取り組み組ま

せている。すぐに解き終える児童がいる一方、問題が解けずに困っている児童もいる。そこでD教諭は、下線部②のように、はやく解き終えた児童に対して、困っている人を探し、声をかけてあげるよう指示している。

事例2

発話者	内容
D教諭	これはもう5年の問題とかそういうレベルじゃない。3年生や4年生の分数の話になってくる。③ <u>隣の人が約分で戸惑っていたら教えてあげて</u>

事例2は、算数の授業中に約分をする問題を取り組んでいる場面である。ここでも、すぐに問題を解けている児童がいる一方、一部の児童は約分のやり方が分からないでいる。そこで、D教諭は下線部③のように、すでに解けている児童に向けて、困っている人がいたら教えてあげるよう指示している。

このように、D教諭は、「困っている人に目を向け、援助する行動」を望ましい姿として提示していることが分かる。

事例1, 2に関するインタビュー

発話者	内容
D教諭	それは普段の関係作りで大事なことであって、④ <u>あの人が機嫌悪いから今話しかけたらやめようかなとか。あの人が元気がなさそうだから声かけようかなって注目してなきゃ関心がなきゃ気づかないし、そういったのを些細ですけど、授業のそういう一場面とかで育てているっていう感じですかね。でもそれも本当に年度当初に関わりっていうのは大事だっていうのは言ってスタートしているの、言葉にしないけど、⑤<u>相手に注目して関わるっていうか、関心を持つっていうか、ということをお互い言葉にはしないけど、無意識にやりながらそういう力をつけていっているという感じですかね。</u></u>

上記は、「困っている人に目を向け、援助する行動」を望ましい姿として提示する指導行動に関して、インタビューした場面である。下線部④⑤では、友達の気持ちに積極的に目を向け、友達の機嫌が悪かったり、元気がなかったりなどの気持ちを察知しようとする重要性を述べている。このように、D教諭は〈他者の感情に関心を持ち、察知する力を育成する信念〉を持っていることが分かる。菊池（前掲）によると、困っている状況や気持ちに気付くことが、向社会的行動が生起するプロセスの始まりであることを示している⁽²⁹⁾。また、蔵永（前掲）は、相手の気持ちを理解しようとする力を促す仕掛けを考えていくことで、児童の共感性が育ち、向社会的行動が表れることを示している⁽³⁰⁾。これらのことから、〈他者の感情に関心を持ち、察知する力を育成する信念〉を基に、「困っている人に目を向け、援助する行動」を提示する指導行動によって、児童の向社会的行動が促進されていた可能性が窺える。

3. 2. 2 〈価値を実感しながら、感謝し合う雰囲気を広めていく信念〉

事例3

発話者	内容
D教諭	次ですじゃあ、配り物します。はい、⑥ <u>ありがとりのリレーで渡していただきますい。</u> どっか余ったら先生に頂戴、どっかで余るはず。

事例3は、帰りの会での配付物を配る場面である。下線部⑥の「ありがとりのリレー」とは、配付物を受け取ったときに「ありがとう」と感謝を伝え、後ろに渡していくという行動である。「ありがとりのリレー」は他の日の帰りの会でも見られ、日常的に実施していることが分かる。

事例 4

発話者	内容
D教諭	えっとじゃあ、今日2限にお話をした⑦ <u>「ハッピーレター」</u> をやります。iPod出して今日1日に見つけたお友達のいいところを直接あのパドレットのところに打ち込んでみてください。3分時間あげるのでも3分だけできる人は、隣の人にだけじゃなくてももちろんいいです。⑧ <u>このクラスのお友達で今日こんなところが頑張ってたとか、こんな素敵な姿あったなっていう人にパドレットを送ってあげましょう。</u> (中略)まもなく入力の時間を終わりにします。1人以上入力できれば終わりにしてください。いいよ、⑨ <u>できれば帰りの会など直接言ったり、お礼を伝えたりするのもいいと思います。</u>

事例4は、帰りの会にて、下線部⑦の「ハッピーレター」という取り組みを行う場面である。この取り組みは、自分やクラスのために頑張ってくれた友達に、「○○してくれてありがとう」のように感謝を伝える取り組みである。パドレットとは、C学級において度々使用されているWebのオンライン掲示板のアプリであり、パドレットを使った「ハッピーレター」は、これまで数回実施されてきていた。下線部⑧⑨のように、友達への感謝の言葉を、パドレットを通して伝えたり、直接伝えたりする行動を望ましい姿として示している。

このようにD教諭は、「ありがとうのリレー」や「ハッピーレター」を通して、「感謝を伝える行動」を望ましい姿として提示していることが分かる。

事例 3, 4 に関するインタビュー

発話者	内容
筆者	もう一つ、帰りの学活の中の気になったもので、「ありがとうのリレー」で渡していくという取り組みの意図を教えてくださいませんか。
D教諭	(前略)例えばプリント配るときも「プリント配ってくれてありがとう。」「○○さんありがとう。」とかっていう風に言っていこうねっていうのを、9月のあたりに口酸っぱく言ったら根付いてるというか。定着した子は今でもあえて言ってる。その子も、私からプリントをもらうときには「ありがとうございますありがとう」とかっていう風にしてる。当たり前些細なんですけど、そういったところからやり取りができるかなと思っているので、続けてやっています。
筆者	やり取りができるというところで、「ありがとう」みたいなのを言うことで、子どもがどうやって受け取るとか、どうやって広がっていくとかありますか？
D教諭	でも⑩ <u>単純にありがとうって言われて嬉しいじゃないですか。理由がついたら、私はこれをしたから今感謝されたんだなとかっていう風に思えるじゃないですか。</u> そういう⑪ <u>クラスがそれを言う雰囲気になっていくと広がっていくと思うんです。</u> (中略)⑫ <u>クラスの雰囲気の中で巻き込まれながらやっていく。その中で⑬自分もされていい思いしたことってきっとあるはずだから、その中で良さを実感して、ただやるじゃなくて意味を持ってやれるようになっていくのが理想ではあるかなと思うんですけど、</u>

上記は、「感謝を伝える行動」を提示する指導行動に関して、インタビューした場面である。下線部⑩⑬より、感謝を伝え合う中で、向社会的行動の良さや価値を実感でき、向社会的行動が促進されていくという考えを持っていることが分かる。そして、下線部⑪⑫より、児童同士が感謝し合う雰囲気を学級に広げていこうとする意図が窺える。このように〈価値を実感しながら、感謝し合う雰囲気を広めていく信念〉が窺える。蔵永(前掲)は、自分が得たものの価値を認知することで、向社会的行動の基となる感謝が生起し、向社会的行動をしてくれた相手だけでなく、周囲の人々に対しても向社会的行動をとりやすくなる傾向を示している⁽³¹⁾。このことから、〈価値を実感しながら、感謝し合う雰囲気を広めていく信念〉を基に、「ありがとうのリレー」や「ハッピーレター」のような「感謝を伝える行動」を提示することによって、児童の向社会的行動が促進されていた可能性が窺える。

4 総合考察

本研究の目的は、向社会的行動を促す教師の指導行動を、「指導に関する信念」と関連付けながら、その具体を明らかにすることであった。このことを明らかにするために、分析1「指導行動のカテゴリーについて」、分析2「指導行動の具体例と『指導に関する信念』の関連について」を通して考察した。

分析1の結果、向社会的行動を促す働きかけは、8つの指導行動カテゴリーに分類された。さらに、D教諭は、**【行動の提示】**が他の指導行動と比べて相対的に多く、この指導行動をより強く意識しながら向社会的行動を促進していることが推察された。このことに関して、塚本（前掲）は、小学生段階において、児童のとるべき行動を直接指示要請する「指示的態度」が、向社会的行動を促す効果的な指導法である可能性を示唆しているため⁽³²⁾、児童の向社会的行動を促進するために、望ましい姿やとるべき行動を積極的に提示していく必要性を示唆するものになったと考えられる。

分析2の結果、まず、「困っている人に目を向け、援助する行動」を望ましい姿として提示する指導行動が見られた。その背景には、〈他者の感情に関心を持ち、察知する力を育成する信念〉があることが確認できた。村上ら（2014）は「他者の感情に関心を持ち、敏感に察知する傾向」を「他者感情への敏感性」とし、共感性の構成要素の一つに位置付けられてきたことを示した⁽³³⁾。共感性は向社会的行動を促し（植木ら、2008）⁽³⁴⁾、そのうち「他者への敏感性」は、小学生段階において、向社会的行動と特に関連が強い（村上ら、前掲）⁽³⁵⁾ため、「他者感情への敏感性」を中心として共感性を育み、向社会的行動を促進していくことが効果的指導であると示唆される。また、「感謝を伝える行動」を提示する指導行動が見られた。その背景には、〈価値を実感しながら、感謝し合う雰囲気を広めていく信念〉が確認された。北村（2018）は、対人的感謝が育まれることで向社会的行動が促進されることを示している⁽³⁶⁾。このことから、児童の対人的感謝の育成を志向し、児童が感謝を表出する場面を積極的に設けることで、向社会的行動が促進されていく可能性が考えられる。

そして、〈他者の感情に関心を持ち、察知する力を育成する信念〉と〈価値を実感しながら、感謝し合う雰囲気を広めていく信念〉が確認されたことについて、蔵永（前掲）は、「共感」と「感謝」が思いやりの基盤であると主張した⁽³⁷⁾が、「共感」のうち特に、「他者感情への敏感性」の重要性を指摘する新たな可能性が見出されたと考えられる。また、藤原ら（2014）は、対人的感謝と共感性に正の関連があることを明らかにし⁽³⁸⁾、蔵永（前掲）は、「共感」によって利他性が引き出され、「感謝」によってその利他性を発展させるという流れを示している⁽³⁹⁾。これらのことから、「共感性」、次いで「感謝」を育むことで向社会的行動につながるという流れがあると分かる。つまり、D教諭の指導行動の背景にある2つの信念には、まず、共感性の要素の一つである「他者感情への敏感性」を育み、次いで「対人的感謝」を育成するというプロセスが存在する可能性が示唆される。

以上をまとめると、まず友達の気持ちに目を向けさせ、次いで向社会的行動の価値や良さを実感しながら、児童同士が感謝し合う雰囲気を広げていくことを志向し、それらを望ましい姿やとるべき行動として積極的に提示していくことで、向社会的行動を促進していた可能性が示唆された。

本研究の考察によって、向社会的行動を促す際の手立てや意識の一可能性が示唆されたため、先に述べた子どもの学校不適応や人間関係上の問題を改善する手立ての一助となったと言える。

5 今後の課題

本研究では、児童の向社会的行動を促進する指導行動の具体を、「指導に関する信念」と関連付けて明らかにした。その結果、まず「他者感情への敏感性」を、次いで「対人的感謝」を育成することを志向する信念をもとに、それらを望ましい姿やとるべき行動として積極的に提示していくことで、向社会的行動を促進していた可能性が示唆された。

一方で、本研究では向社会的行動が多く行われている状態にある学級の担任教師の指導行動に着目し、分析を行った。また、C学級は持ち上がりであったこともあり、向社会的行動がまだ促進されていない初期段階での教師の指導行動については明らかにできていない。今後は、様々な時期における指導行動を分析していく必要がある。また、本研究では、指導行動数の半数以上を占めた**【行動の提示】**の具体例や信念を分析したが、次いで多くみられた**【承認】****【他児童へのモデリング】**の影響も否めないため、他の指導行動の具体や信念に関しても、より詳細な分析が求められる。さらに、本研究は授業場面、朝の会、帰りの会での指導行動に着目したが、教師は日常的に向社会的行動を促進している（村井・岡本、前掲）⁽⁴⁰⁾ため、休み時間や給食などの場面も含め、より多くの事例を集めて、向社会

的行動を促す指導行動を詳細に検討していく必要がある。

引用参考文献

- (1) 文部科学省 (2023) : 「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」
https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_2.pdf (2023年12月4日最終閲覧)
- (2) 文部科学省 (2017a) : 「いじめの防止等のための基本的な方針」10.
- (3) 文部科学省 (2017b) : 「小学校学習指導要領解説総則」28-29.
- (4) 山村麻予・中谷素之 (2012) : 「児童が考える『思いやり』行動とはどのような行動か：小学生を対象にした自由記述調査から」大阪大学教育学年報, 17, 31-44.
- (5) 坂井玲奈 (2006) : 「思いやりに関する研究の概観と展望—行動に表れない思いやりに着目する必要性の提唱—」東京大学大学院教育学研究科紀要, 45, 143-148.
- (6) 塚本伸一 (2017) : 「教師の指導態度, 学級集団構造, 学級雰囲気は児童の向社会的行動に及ぼす影響」キリスト教教育研究, 34, 21-36.
- (7) Eisenberg & Mussen (1989) : 「The roots of prosocial behavior in children」Cambridge University Press. (アイゼンバーグ&マッセン. 菊池章夫・二宮克美 (訳) (1991) : 「思いやり行動の発達心理」金子書房, 6.)
- (8) 菊池章夫 (1983) : 「展望 向社会的行動の発達」教育心理学年報, 23, 118-129.
- (9) 前掲 (6)
- (10) 村井あかり・岡本吉生 (2019) : 「向社会的行動を促す教師の働きかけと子どもの準備性」日本女子大学大学院紀要, 25, 43-52.
- (11) 蔵永瞳 (2020) : 「利他性を育む学級運営—共感と感謝に着目して—」日本学校心理学会, 13, 34-42.
- (12) 前掲 (6)
- (13) 前掲 (11)
- (14) 前掲 (10)
- (15) 山本琢俊・河村茂雄・上淵寿 (2021) : 「学級の社会的目標構造とクラスメイトへの自律的な向社会的行動との関連—小中学生の際に着目して—」教育心理学研究, 52, 52-63.
- (16) 岡井鴻介・梶井芳明 (2021) : 「教師の指導に関する信念についての研究の概観と展望」東京学芸大学紀要, 72, 129-139.
- (17) 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1990) : 「教師の実践思考様式に関する研究 (1)」東京大学教育学部紀要, 30, 177-198.
- (18) 秋田喜代美 (1992) : 「教師の知識と思考に関する研究動向」東京大学教育学部紀要, 32, 221-232.
- (19) 前掲 (10)
- (20) 前掲 (6)
- (21) 前掲 (15)
- (22) 前掲 (10)
- (23) 前掲 (18)
- (24) 前掲 (10)
- (25) 岸俊行・野嶋栄一郎 (2006) : 「小学校国語科授業における教師発話・児童発話に基づく授業実践の構造分析」教育心理学研究, 54, 322-333.
- (26) 黒羽正見 (1999) : 「教育行為に表出する教師の信念に関する事例的考察」日本教師教育学会年報, 8, 89-97.
- (27) 前掲 (6)
- (28) 前掲 (26)
- (29) 前掲 (8)
- (30) 前掲 (11)
- (31) 前掲 (11)
- (32) 前掲 (6)
- (33) 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2014) : 「小中学生における共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連：子ども用認知・感情共感性尺度の信頼性・妥当性の検討」発達心理学研究, 25, 399-411.
- (34) 植木みゆき・萩原俊彦・及川千都子・大内昌子・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂雄 (2008) : 「共感性と向社会的行動との関連の検討—共感性プロセス尺度を用いて—」筑波大学心理学研究, 36, 49-56.
- (35) 前掲 (33)
- (36) 北村瑞穂 (2018) : 「児童における対人的感謝と向社会的行動の関係—発達の視点からの検討—」大阪樟蔭女子大学研究紀要, 8, 179-188.
- (37) 前掲 (11)
- (38) 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014) : 「小学生における対人的感謝尺度の作成」教育心理学研究, 62, 187-196.
- (39) 前掲 (11)
- (40) 前掲 (10)

A Case Study of Teacher Engagement to Promote Prosocial Behavior

～A Case Study of Teachers' Approach to Promote Prosocial Behavior

Nobuki NAKADA* · Shinji AKASAKA**

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the specifics of how teachers encourage prosocial behavior by analyzing the relationship between “beliefs about teaching” and teaching behavior. As a result, we found that the teachers presented “behavior that looks at people in need and helps them” and “behavior that expresses gratitude” in a desirable manner [Presentation of Behavior]. As a background for this, it was confirmed that they had “a belief in fostering the ability to pay attention to and perceive the feelings of others” and “a belief in fostering an atmosphere of mutual appreciation. These results suggest that the children’s first priority was to cultivate the ability to pay attention to and notice their friends’ feelings and to be grateful to them, and that by actively presenting these as desirable behaviors and actions to take, they may have promoted pro-social behavior.

* Tsukidu Elementary school ** School Education